

表現者の学生相談～パフォーマンス（の知）とその言語化～

The Student Counseling at University of Arts Part II.

山川 裕樹

YAMAKAWA Hiroki

表現者の学生相談～パフォーマンス（の知）とその言語化～

Student Counseling at Arts Universities Part II.
— Performance knowledge and Its Verbalization —

山川 裕樹
YAMAKAWA Hiroki

教授（心理臨床学、学生相談）

This paper draws on student counseling at two universities of arts to consider art and music students. In this study, I will consider the relationship between performance knowledge and its verbalization. How does language function in the acquisition of performance? With reference to several ideas, I have considered the relationship between physical skill acquisition and language.

1. はじめに

本稿は、昨年に引き続き、2022年10月に日本スポーツ心理学会認定資格であるスポーツメンタルトレーニング指導士の全国研修会において行った「表現者の学生相談」と題した講演の一部をまとめ直したものである。昨年は、その講演から「芸術大学は「好きなことをしている人」の集まりなのか～「やりたいこと」と「周りの求めること」のせめぎ合いについて～」について取り上げたが、本稿では、もう一つのテーマである「パフォーマンス（の知）とその言語化～言語はパフォーマンスを止める（だけな）のか？～」について取り上げる。

杉原（2012）は、カウンセリングの営みを、音楽や演劇のようなパフォーマンス・アートであると捉え、頭で分かるだけでなく身体的に習得できるようになることが必要な^{アート}技芸であると説いている。河合（2003）が中村（1992）の「臨床の知」を援用して考えていたのも、まさにそこであろう。スポーツは当然パフォーマンスに関わることであり、音楽や美術の制作もパフォーマンスに関わる身体知に属する。カウンセリングも、そうしたパフォーマンス・アートであるというのが杉原（2012）の考えであるが、筆者もまさにそう感じる。

しかし、そうしたパフォーマンスの側面は、ことばにするのが難しい領域でもある。そして、我々は無意識裡に、「ことばにできること」を上等なものに、「ことばにできないこと」を下等なものに見ながちなところがある。「初等教育」と「高等教育」で考えてみても、高等教育のほうがどこか「高級」なもののように捉えがちだろう。しかし、実際のところ、言語でやりとりされる以前の要素が多いコミュニケーションほど情報量の多いものはなく、言語以前の領域が多く占める初等教育にしてもパフォーマンスにしても、そ

のやりとりの仔細な分析は簡単なことではない。言語による情報の圧縮作用を受ける以前の、身体の動きなり絵画や音楽などの芸術なり、そして人と人とが相対してやりとりする情報の機微なりは、言語による伝達が相当困難な領域である。

そうした、言語以前の領域が多くを占めるパフォーマンス（の知）と、そしてその言語との関係について、少し考えてみようというのが今回の試論である。アートと心理臨床の交錯点を意識しつつ、筆者のこれまでの臨床体験や教育体験をもとに、パフォーマンスと言語化の関係について考えてみたい〔註1〕。

2. 「作品との対話」

まず、授業内の学生コメントを紹介するところから始めたい。正確な文言ではないが、概ね以下のようなものであった。

【先生と作品制作について雑談していた。学生同士のあいだで「作品の声を聴いて、この作品がどうしてほしいのか、作品と対話しながら制作を進めている」と話していたら、先生は「昔はそういうこともしていたけれど、今はしていないなあ」と云っていた。】

このコメントから、こう考えることも可能であろう。「初心者は作品と対話をするが、プロは作品と対話をしない」、と。

しかし、果たしてそれが本当に正しいのだろうか。どれほど事態を正確に描写しているだろうか。そのことを考えるために、中井(2002)が精神療法の科学性を考えるために書いた小論において引用していた、哲学者ドレイファス兄弟によるスキルの五段階モデルを取り上げたい。

Dreyfus (2004) は、スキルの成長を、初心者 novice・新人 advanced beginner・一人前 competent・プロフェッショナル proficient・達人 expert の五段階に分けた。簡単に説明すると、初心者は、文脈に左右されない context-free ルール、つまりどのような状況でも通用するマニュアルに従って動く。そして、新人から一人前になるにつれて、次第に状況に応じた行動規則が使えるようになっていく。プロフェッショナルにまで達すると、大局観をもって物事に対処できるようになり、沢山の情報から重要なもののみをピックアップした行動ができるようになる。また、マニュアルよりも過去の経験を元にした対応が可能になるという。達人ともなると、状況の分析すら不要で、経験に裏打ちされた理解によって直観的な判断が下せるようになる。判断以前の行動として、「すべきことをただなすだけ」となる、という。

このスキルの成熟説は興味深いもので、例えば看護師の技能向上を論じた Benner (1984/2005) でも引用されており、身体知・実践知が重視される局面での見取り図として活用しうるものである。まず

は、文脈から切り離された行動規則を習得することで、最低限のものを身につける。しかしそのスキルを様々な文脈の中で用いることを通し、次第にそのバリエーションが増えていく。そしてプロともなると、情報の中で重要なもののみを拾い上げ、マニュアルからは離れた判断が行えるようになる。達人の域まで達すると、状況の理解などはせずとも、「ただそうする」だけとなる。つまり、いわゆる「マニュアル」は、文脈に左右されないかもしれないが、文脈から切り離されたところで成り立つに過ぎず、文脈にあふれた(context-full?) 現実場面において適応できる範囲は決して広くはない、とも云える。そして技能が習得されるに従って、そのマニュアルは言語文化から身体知に近付いていき、文脈に応じたものとして使いこなせるようになる。だからこそ達人の振る舞いは、ある一定の手続きを示すマニュアルからはどんどん離れていくようになるのだろう。

さて、先の学生のコメントに戻りたい。先のコメントを元に、「作品と対話するのは初心者であり、プロは作品と対話しない」と考えてもいい。しかし、次のような可能性もあるのではないか。すなわち、「作品と対話する」ことが、意識的に行われてはいないとしても、無意識的に＝身体的に行われている可能性、である。つまり、教員による「昔は作品と対話をしていたが、今はしていない」という発言は、「昔は作品と（言語的に／意識的に）対話をしていたが、今は（言語的には）していない（が無意識的に作品と対話している）」とも考えられるのではないだろうか。

技術習得は、最初はなにかを参照しながら行われる。パソコンのブラインドタッチにしてもそうだし、もっと身近な例で言えば「家の電気のスイッチを入れる」でもかまわない。最初はその対象を見ながら、確認しながら行う。しかしそのうちに、その対象を見ずとも、あるいはなにかを「考える」ということをせずとも、その行動は身体化される。現に筆者は今、文章をそれなりの速度で入力しているが、キーボードの文字の位置をほぼ意識することなく、ただ頭に思いついた文字を入力している感覚しか筆者には存在していない。例えば「文字」ということばを取っても、（ローマ字入力なので）「MOJI」と入力しているが、筆者においてキーボードの「J」の位置は考えないと出てこないにもかかわらず、「MOJI」と打ち込むことは可能である（逆に、「MOJI」と打ち込むことを思い浮かべてようやく「J」の位置が意識化される）。時になにかそれがほころんで（例えば打ち間違いなど）、改めてそれを視覚的に確認することもあるが、一番スムーズに行えているときは、それがそこにあることすらほぼ意識されないであろう。

そうしたことも踏まえ考えると、「作品と対話する」ということは、初学者のうちはそれを意識的に行うことで達成が可能となるが、作品を作り続けていくうちにその行動は身体化され、一見作品と対話

していないようであるが、「作品と対話する」ことによって達成される内的なプロセスの実質が、無意識裡に行われている、という可能性もあるのではないだろうか。むしろ我々のパフォーマンスの向上は、意識的な認識が、次第に無意識的＝身体的になっていくプロセスだとも云えるだろう。ではしかし、意識的な認識は、将来的には消えてなくなるものなのだから、なくてよい、というものなのだろうか。

3. パフォーマンスにおいて言語はどのように関与するのか

パフォーマンスと言語の関係について、諏訪 (2016) は非常に興味深い話を報告している。それは、卒業論文でボウリングをやり続け、ボウリングのスキルを学ぶプロセスを観察し分析する、という試みをした大学生の例である。そのプロセスは全部で4期に分けられ、そのスコアと内省報告が分析されている。いわく、「身体の詳細部位への意識が増加した第一期と第三期はスコアが悪く、身体全体への大雑把な意識が増加した第二期と第四期にはスコアが良い」(諏訪、2016)。

ここから、「[身体の詳細な部位に意識を向けるとスキルの上達にマイナスの影響がある。詳細ではなく大雑把に身体を考えられることができるようになるとスキルが獲得される」と読者の方は解釈したくなるかも」(諏訪、2016) しれないが、諏訪自身の解釈は異なるという。身体への詳細な意識化とスコアは確かに相関があるかもしれないが、因果関係であるとは限らない。身体知に詳細に意識を向け、あれこれ模索する時期(=スランプ)と、あるポイントに言語が収束し整理される時期(=こつの習得)があり、スランプは「その後上達するための準備期間」(諏訪、2016)と捉えたのである。

我々は、パフォーマンスの知が働くところにおいて、達人による「言語化せずとも(体験から)直観的に判断を行う」姿を見て、言語を介した理解を、パフォーマンスを妨げるものに見てしまいがちである。しかし、それを外形的に真似したところで、エキスパートになれるのだろうか。言語は、技術習得にどのように関与しているのだろうか。

そもそも、パフォーマンスとは、(一般化された)他者の体でなく、(固有の)自分の身体を使って行う営為である。他人のスタイルを参考に行うものではあるが、最終は自身で遂行できないと意味がない。「空手習ってるんや、通信教育やけどな」がギャグとして成立するのは、パフォーマンスこそが重要となる武術において、紙上で習うだけでは何ら意味を持たない、との前提を我々が共有するからである。パフォーマンスは、机上の論理を習得するだけでは意味がなく、自分自身で実践できるような、身体の知が伴っていることこそが必

要なのである。先の諏訪(2016)も踏まえて考えると、我々のパフォーマンス向上は、言語による模索(「ああでもない、こうでもない」とそこからの離脱(「あ、そうか」)の繰り返しにある、と考えられるだろう。

ここで、筆者のフィールドである心理臨床実践の話に移す。心理臨床実践からの学びを考えたときに、例えば、うまくいった一場面を取り出し、その奏功要因を考えるという発想は一つあるだろう。例えばこちらが発した一言で生じた洞察があるとすれば、その一言に洞察の要因を求める、などである。

確かに、そうした変化の一瞬が生じることはある。それがカウンセラーの一言である場合もあろうし、指導教員から発せられた一言である場合もあるし、友人の何気ない一言であってもいい。とんち話で知られる一休宗純は、闇夜の中でカラスが鳴くのを聞いて大悟したと言われる(例えば水上(1997))。確かに、カラスの鳴き声は一休の悟りのきっかけとなった。では、カラスの鳴き声があれば人は悟りを得ることができるのか。

おそらくそうではない。一休はそれまでに悩み、あれこれ考え、闇夜の中で坐禅をするときに、カラスの声が響いた。その時に大切なのは、それまでの準備状態であって、カラスの一声ではない。確かに、カラスの一声が、一休のこれまでの悩みを打ち開くことを可能にした。その時に大切なのは、それ以前の準備状態であって、その準備状態さえ整えられておれば、カラスの一声でない別のなにかでもおそらくその悟りは生じたとも充分想定しうる。過冷却現象をイメージしてもよい。衝撃のない環境でゆっくりと時間をかけて水(液体)を冷やし続けると、凝固点を下回っても水(液体)は氷(固体)にならず水のまま存在している。その液体(=過冷却状態)は、何らかの衝撃を与えると急激に固体(氷)になる。この変化を捉えて、「衝撃」を大事と考えるのか「過冷却」を大事と考えるのか、という話である。

劇的な変化は、確かに目を惹く。その時我々は、わかりやすいポイントに目をとらわれてしまう。過冷却現象でいうと、「衝撃を与えることで固体になった」、である。そして単純に、この「衝撃→固体化」を、「技法」として取り出そうとするかもしれない。しかし、それは文脈を無視した過度の一般化である。河合は、事例の表面的な理解の例として、先生に怒鳴られたことで出席を再開した不登校児を挙げ、「すべての不登校生に対してもその方法(引用者註:怒鳴りつけること)が有効ということはないので、ひとつの事例を聞いてもあまり役立たない」(河合、1992)と皮相に考えてしまうこともあるという。これは事例研究で時折起こる誤った一般化であるが、だからといってこの事例に学ぶところがないというわけではない。その不登校児がどのような状態にあり、その文脈において、先生に怒られることがその当人にとってどのような意味を持ったのか、ということまで見て、事例研究が成り立つのである。河合(1992)はそれを、「個々の事例をできるだけ詳しく発表する事例研究」だとし

ている。つまり「怒鳴る→登校再開」のような、その変化の直接（のように見える）要因に帰属するのではない、その要因が作用するための準備状態を問うことが、事例を理解する上で大切になるのである。

諏訪（2016）の論が興味深いのは、まさにこのポイントだろう。諏訪（2016）では、スランプをマイナスのものと位置づけるのではなく、これからの変化に必要な準備段階と見なしている。言語が収斂し、ごちゃごちゃと考えなくなる状態が目指すべき状態だとすると、我々は言語を技能習得の妨げになると見なしがちである。しかし、そうではない。あれこれと迷い、考え、悩み、謂わば心理的な「過冷却状態」を発生せしめた上で、なにかのきっかけ（衝撃）が与えられることにより、スランプからの離脱（＝コツの習得）が起きる。逆に云えば、身体知の習得前には、言語とともに試行錯誤する時期が存在している。そして「衝撃」ではなく「過冷却」こそを本質と考えるのであれば、コツの習得において重要なのは「どのような衝撃を起こすか」ではなく、「過冷却現象を保障するための器」、言い換えるならば「変容を準備する混沌を保障する器」にある、と云えるのではなからうか。

身体知において習得された「コツ」は、非常にシンプルなものになる。その言語化も（身体知なので困難だろうが）可能かもしれない。しかし、その「コツの習得」を考えると、そう容易に事は運ばないだろう。前回の山川（2023）において論じた、「好きにやればいい」をめぐる葛藤もまさにこの筋にある。「自分の好きにやればいい」というコツは、習得されてしまえばなんてことのないシンプルな言表なのだけれども、それがなかなかそのように行動できない。腹の底からそう思えるようになるまでは、その人なりの試行錯誤のプロセスが必要となる。そしてある拍子に、「あ、自分の好きにやればいいということは、こう云うことだったんだ」と身体的な理解として腑に落ちる。そのコツの習得の上で大切なのは、習得されるべき「自分の好きにやればいい」というコツというよりも、そのコツの習得までにごちゃごちゃとした混沌を抱え、変容が起こる時期をひたすら待ち、持ちこたえる器にあるだろう。

その混沌のさなかには、様々なことばが生まれ、消えていく。その時のことばは、多義性に富んだことばが望ましいだろう。ああでもないこうでもないとの迷いに対し、その豊かさを保障し、連想を拡げるようなことばである。説明するための言語ではなく、詩や短歌のようなことばになるだろうか。日本の芸論では、守破離として、最初は型を守り最後は型から離れるのがよいとされる。最終的に離れるのではあるが、しかし最初に必要なものとしての型が想定されている。ことばも同じような役割を果たすことだろう。最終的に不要になるとしても、それは不要なものなのではない。パフォーマンス習得におけることばとは、そうした二重性が求められていると考える。

4. おわりに

こうした「身体知」のことを考えてみたくなかったのも、コロナ禍の影響があるように思う。コロナ禍により大学教育は一気に電子化され、遠隔授業も増えた。その知の習得には、電子化された情報の伝達こそがすべてであるように扱われることも増えた。とりわけ、学生の側でそうした態度が増えているようだ。

しかし、我々の技術習得は、知的側面だけに限らない。情報のやりとりだけでなく、文脈依存的な各種要素が詰まっている。情報として扱われることの多い理系の研究にしても、「研究室における教育」は、我々が思う以上に身体知・実践知伝達の間であるのではないだろうか。況んや、美術教育においてをや。

ただし、身体的なことであればすべて身体知である、とするのはシンプルに過ぎよう。デジタル的な情報伝達でも、受け取り手がアナログ的に解読することも可能である（詩的言語は、紙の上の文字であっても人のこころをゆさぶる）。達人臨床家の技（神田橋・白柳、2018）に感銘を受けることはあるが、それは紙の上の文字でも起こりうる（もちろん対面であればより刺激的だろう）。つまるところ受け取り手のデコーディング能力次第ではあるのだが、電子化された情報と対面で伝達される情報では、前者はどうしても「情報処理」的に扱われてしまいがちなのも確かである。もちろん逆に、対面で伝達していても、情報処理になってしまう場合もある。外的条件ですべてが決まるほど、こころの世界はナイーブではない。

大量の情報による恩恵は筆者自身も受けており、コンピュータを用いないと論文一つ書けなくなっている。ただ、大量の情報により、なにを駆動するのか、なにが目指されているのかを見据えておれば、情報＝言語を活用すべきものとして捉えることは十分に可能であろう。ことばを、守破離の型のように、いずれはそこから離れることを意識しながら用いることは、なかなか難しいことでもあろうが、身体から切り離された知を崇め奉らないためにも必要なことでもある。パフォーマンスの知を向上させるために、どのようなことばの用い方がありえるのか、このテーマについては引き続き考えていきたい。

[註1] なお、本論は、山川（2020）での考えを下敷きにしたので、そちらの議論とも重なるところがあることをお断りしておく。

参考文献

- Benner, P. 1984 *From Novice to Expert: Excellence and power in clinical nursing practice*. Addison-Wesley. (井部俊子監訳 2005 ベナー看護論 新訳版. 医学書院.)
- Dreyfus, S. E. 2004 The Five-Stage Model of Adult Skill Acquisition. *Bulletin of Science Technology & Society*, 24(3), 177-181. doi: 10.1177/0270467604264992
- 神田橋條治・白柳直子 2018 神田橋條治の精神科診察室. IAP 出版.

- 河合隼雄 1992 心理療法序説. 岩波書店.
河合隼雄 2003 臨床心理学ノート. 金剛出版.
水上勉 1997 一休. 中央公論新社.
中井久夫 2002 医学・精神医学・精神療法は科学か こころの科学, 101, 2-12.
日本評論社. (中井久夫 2004 徴候・記憶・外傷. みすず書房.)
中村雄二郎 1992 臨床の知とは何か. 岩波書店.
杉原保史 2012 技芸としてのカウンセリング入門. 創元社.
諏訪正樹 2016 「こつ」と「スランプ」の研究. 講談社.
山川裕樹 2020 実践研究の研究生は何によって担保されるのか. 成安造形大学紀要, 11, 71-88.
山川裕樹 2023 表現者の学生相談——「やりたいこと」と「周りの求めること」と——. 成安造形大学紀要, 14, 3-12.
Waitzkin, J. 2007 *The Art of Learning*. Free Press. (吉田俊太郎訳 2015 習得への情熱. みすず書房.)